

『私たちの体にアマテラスの血が流れている』のトピック (本書の「解説」(田中充子)より抜粋)

「天皇」とは何か 天皇は、もちろん上田が作り出した言葉ではない。しかし本書のキーワードの一つで、上田は数々の不思議な日本文化のなかで「とりわけ天皇がわからない」という。なるほど第二次世界大戦中たびたび御前会議を主宰して開戦も終戦も決せられた天皇が、敗戦後、退位も、追放も、処刑もされずに今までどおりその地位に留まられた。そして日本はその天皇を戴いたまま敗戦後十年にして、多くの戦勝国を尻目に世界の経済大国にのし上った。世界から見れば何とも不思議な国である。「天皇とはそんなに有難いのか」と世界の人々はおもっているのではないか。そこで上田はその天皇に「縄文人アマテラス」の影を見、縄文以来一万五千年の日本人の歴史を読み解こうとするのである。

「泥海」とは何か そのため改めて日本の風土を考える。つまり日本列島を「砂山と泥海」と見る。しかし一万五千年前の氷河期明けはそうだったかも知れないが、今は田園豊かな国である。ところが上田にいわせるとその田園が「泥海」なのだ。私が見たまま五、六月ごろ飛行機に乗って窓から下を見下ろしたとき、大阪平野が一面キラキラ光っていた。日本人なら誰でも「田んぼが灌漑している」とおもうが、一緒に乗り合わせたイギリス人建築家が「海だ!」といったのには驚いた。なるほど水だらけの田んぼは海に見え、昔は泥海だったというのもあるが嘘ではない。そこで氷期のあとにやってきたシベリア森林採集民は、そういう泥海の泥、つまり微細鉱物粒子の集合体でかつ草木虫魚などの死骸の有機物をも含む粘土を焼いている。いろいろの形の土器を作った。そうして食料革命を引き起こし一万年の縄文時代を築いた。となると、粘土つまり泥は石炭や石油にも匹敵する日本の大資源で、その泥が今日の日本を創った、という上田の言もわからないではない。

「日読み」とは何か 縄文人は上田のいう「温帯ジャングル」の豊かな資源を採集・狩猟・漁撈して生きた。ただし、それら食料資源の出現期間はみな驚くほど短く、花でも実でも鳥でも魚でも十日ぐらいごとに移り変わる。そこで人々は、毎朝、太陽がどこの山の端から出るか、を見て冬至・夏至・春分・秋分を知り、それらから十日ごとの日数を旬とし、旬ごとに森の中で盛りを迎えた草の芽を摘み、木の実を拾い、根を掘り、ウサギやイノシシを毘に追いこみ、海でワカメを刈り、貝を拾い、

魚を獲り、厳しいが、しかし美しいこの砂山と泥海の日本列島を一万年以上も生き抜いた。その名残りが「二至二分の祭」と、十日ごとの「旬」という食料の盛りの期間である。世界に太陽を信仰する国は多いがそれらはみな太陽の光と熱を尊ぶもので、太陽の運行を見てつまり「日読み」をして暦とし、生産に結びつけた国は日本だけだろう。なお日という字は単数ならヒと読むが、複数ならカと読むそうだ。

「戸女」とは何か 縄文時代にそういう太陽観察をやったのは一家の女主人の戸女^{とめ}である。であるからトメが巫女として尊崇された。その巫女はいつも首に勾玉のネックレスをつけていた。上田はそれを『古事記』の記述から、巫女が毎朝その珠の間を鍵となる穴珠を動かして旬日を記憶する装置と見る。太陽の巫女といわれたアマテラスもその典型で、ためにスサノヲの蛮行を怒ってアマテラスが天の岩屋に籠もって世の中が真っ暗になったのも、アマテラスがカヨミを止めたために人々は旬が分からなくなったからという。のちそのカヨミを天皇がおこなって人民から感謝された。天皇がアマテラスの影というわけだろう。

「アマツカミ」とは何か その天皇の祖先を、大陸の大動乱のなから日本にやってき「天つ神族」とするが、それには征服民や亡国民などのいろいろの説がある。しかし上田は、シベリアの遊牧民が気候の寒冷化にもなつてやってきた男ばかりの「開拓民」とする。たしかに日本に来てからも男ばかりで「天孫降臨」を繰り返して、現地の女を妻問いするかれらの行動様式を見るとそうかもしれない。そしてこの列島で、かれら「シベリア遊牧民」と、さらに南から舟で渡ってきた「江南舟行民」つまり海人族との混血で日本人と日本国家が作られたという。それも近々二〜三千年のことではなく、氷期が終わってから以降一万年つづいて繰り返したパターンとする。さらにいろいろの人種も来たが、みなカヨミを始めとする同一文化に従ったという。事の真偽はともかく、面白い見方である。

「高天原」とは何か そのアマツカミ族が日本に来て住んだ高天原については、明治くらい歴史学者のあいだでいろいろ論争がある。上田はそれを、大國主が国譲りの条件として要求した「大地の底に達するような太い柱と高天原に届くような高い千木とをもつ(日の御子の宮)」と読み解く。すると高天原は巨木建築を建てるための太い木材を多く産出する地、たとえば北陸ということになる。そこは多雪地帯のために垂直な大木が育つ。じつさい真脇遺跡や桜町遺跡、チカモリ遺跡などからは巨

木列柱や丸木舟の遺跡が多数出土している。建築用材の入手から読み解いた建築家のユニークな説である。なお高天原を加賀平野を取り囲む山々とするが、そこにはアマテラスの母とも見られる菊理媛きくりひめの伝説がある。一つの問題提起だろう。

「アマテラス」とは何か さて問題のアマテラスであるが、彼女はアマツカミ族のイザナキが、キクリヒメつまりアマ族の本拠の筑紫の海岸で裸ぎして左の眼を洗ったときに生まれた巫女とする。するとアマテラスはアマツカミ族とアマ族のハーフである。そのアマテラスは大きくなってカヨミをするから「日の神」である。また子孫に稲作国家の建設を命じた「稲の神」でもある。さらにのちオキナガタラシヒメに朝鮮遠征を命じて七なな枝刀えだなどを得ているから「鉄の神」である。もう一つ、ヤマトヒメたちを伊勢に連れて行き、伊勢を可う怜まし国すなわち美しい国といって多数の木の宮殿を建てさせているから「木の神」にもなった。つまりアマテラスとその子孫は生まれ変わって「日の神」「稲の神」「鉄の神」「木の神」になったのである。そこにアマテラスの本質、日本文化の本願がある、という。

「蹴裂き」とは何か それを具体的にみると、稲作のためにアマテラスの後継者たちは「蹴裂けさき」ということをやった。渇水期のころ、湖沼の周辺の露出した岩頭に大量の枯草や枯木を積んで焼いておくと数日後に雨が降り、岩の表面と内部の温度差によって岩が自然に割れ、湖沼の水が流れ出し、岩が割れた分だけ湖沼の水面が下がる、というものだ。それを繰り返さずとやがて湖沼が干上がって沃野ができる。これは火に習熟した縄文人の技術を受け継いだものとする。そうして大和のモモノヒメの頃には本格的な稲作国家が作られたという。その蹴裂きのシンボルが『魏志倭人伝』のいうヒミコの墓のような各地に残る古墳であるとする。恐ろしい指摘である。たしかにその証拠に、日本の古墳はみなかつて湖沼の名残りの周溝をもっている。稲作のための灌漑用水路であろう。

「スズ鉄」とは何か その稲作国家を推進するものとはとりわけ鉄である。というのも湖沼を干上げた跡の湖底は凹凸だらけで、そこを水田にするためには無数の灌漑用水路が必要だからだ。その用水路作りには堤が、その堤作りには大量の木杭が欠かせず、ために森林伐採の大量の鉄の斧が必要になった。そこで大和朝廷は必死になって鉄を探したが日本に鉄鉱脈は乏しい。では砂鉄か、とおもわれるがその精錬にはいろいろの設備が必要だ。そこで手っ取り早く「スズ鉄」が使われた。スズ鉄とは沼沢地に生える葦や茅などの根っこの周りに付着した鉄バク

テリアの遺骸で、褐鉄鉱の塊である。それなら干あげた後の湖底にいっぱいある。それらは四〇八百度ぐらいの露天タタラで精錬できる。縄文土器を焼くのと変わりが無い。そこで縄文の経験が生きて、そういうスズ鉄作りが大きな仕事になったという。大和の竜田の神がその名残りである。しかしそれも使い尽くしたためオキナガタラシヒメは朝鮮遠征をし、百済の国から鉄を得たという。

「常若」とは何か そうして「稲の国」「鉄の国」が作られたが、そういうアマテラスはヤマトヒメに命じて伊勢の国に鎮座した。のち天武天皇はそこに伊勢神宮をつくった。しかし、アマテラスを祭る伊勢神宮には新しい稲が祀られ、八咫の鏡が置かれるだけで一般人には見えない。それよりいつ見ても素晴らしなのは、白い玉砂利の上に建つ清楚な檜の宮、色、香り、触感などの建築の「若々しさ」である。それは優れた鉄と式年遷宮とによって作られた。それをいつまでも若々しく生きる「常若とこわか」であるとする。そしてシベリア遊牧民の自然愛好心と江南舟行民の技術発明心を持った者が日本人であるとする。つまり、日本人は「常若」の民なのである。

「アマテラスの血」とは何か とはいってもそのアマツカミ族は余りに少なく、ために歴代の天皇たちは味方を増やすために各地の豪族の娘を妻問つまといして多くの皇子や皇女をもうけた、嵯峨天皇はその数五十人といわれた。ために国家の財政を圧迫した。そこで彼らを「臣籍降下」させ「源平藤橘」の四姓を与えた。そこからアマテラスの血を受ける子孫が急速に増え、今日、アマテラスの血は広く日本中に拡散した。しかしそのアマテラスの血の根元は絶えることがない。というのも天皇が死ぬとその血は大嘗祭のときに次の天皇に引き継がれるからだ。つまり天皇が亡くなると「アマテラスの血」は次の天皇に移し変えられる。つまり天皇は「アマテラスの血」の「容器物」で、それにより多くの日本人がアマテラスの血を受ける。それも「生理的な血」というより「文化の血」だ。日本人が皆「同胞」なわけである。すると「伊勢も常若、天皇も常若、日本人もみな常若」なのだ。ために上田は最後に天皇の「伊勢へ帰郷」を提言している。物凄「日本文化論」である。といったようなことを考えると、上田はかつては「軍国少年」「左翼青年」「猛烈中年」「分別老年」であったが、今は「過激老人」というほかない。七〇歳以降に書いた本『呪術がつくった国日本』『一万年の天皇』『西郷隆盛ラストサムライ』『神なき日本』『縄文人に学ぶ』などがそれを物語っている。

「過激常若」とでもいべきか。